

ちひろ美術館・東京 No.209

安曇野ちひろ美術館 No.102

美術館だより

2020.6.20



〈企画展〉 ショーン・タンの世界展 どこでもないどこかへ

主催：ちひろ美術館、信濃毎日新聞社 監修：ショーン・タン、ちひろ美術館
 後援：オーストラリア大使館、絵本学会 協力：株式会社河出書房新社、カンタス航空、ジョン・ハディ、ソフィ・バーン、アシェット・オーストラリア、アレン・アンド・アンウィン 企画制作：株式会社求龍堂、株式会社廣済堂 協賛：株式会社ジャクエツ

●2020年6月27日(土)～8月30日(日)

本展は、昨年、ちひろ美術館・東京で開幕し、大きな反響を呼びました。新型コロナウイルスの影響で開始が遅れましたが、安曇野での展覧会に寄せて、タンからメッセージが届きました。

この重大局面のさなかに、私の展覧会に足を運んでくださり、心から感謝申し上げます。世界中が難しい問題を共有している今、芸術や大切な物語への愛も、もしかするとこれまでよりもっと、みんなで共有していることに改めて気づかされ、心が温まりました。安曇野ちひろ美術館で私の作品を展示し、少しヘンテコな夢をご提供できることを、とても名誉に思います。その夢のなかに、思いがけずおなじみのなにかを感じていただけるとうれいします。そして、どこへ行くにもスケッチブック片手の芸術家仲間たち、ようこそお越しくださいました。あなたの小さな落がきから、大きなアイデアが育っていきますように。

ショーン・タン 2020年5月29日



図1 ショーン・タンの手帳 2008-2009年

今回の展覧会で初公開されたもののひとつが、手帳です(図1)。この手帳には、数年前に発表された絵本に登場する不思議な生き物が息づいていたり、数年後にある物語に展開するイメージが片隅に描かれています。「僕には“半分までできているけれどまだ新しいアイデアが加わることを必要としているアイデア”がたくさんあります。」とタンは語っています*。彼が描くそれぞれの物語は、どこかでつながっているようです。

『遠い町から来た話』には、15編の奇想天外な物語が収められています。物語ごとに異なるタッチで描かれた絵から、多面体のように不思議な世界があらわれます。これらの物語の舞台には、タンが育った西オーストラリア、パース北部の開発中の町の情景が反映されています。

「壊れたおもちゃ」は、ふたりの兄弟が、郊外の住宅地に突然あらわれた潜水夫の後を追ひ、風変わりな老婆ミセスカ



図2 壊れたおもちゃ「遠い町から来た話」(河出書房新社)より 2006年

タヤマとの接点を見出す物語です。日本人が出てくるこの物語のイラストレーションは浮世絵風に描かれています(図2)。

この作品と並行してタンが構想していたのが絵本『夏のルール』です。この絵本にもふたりの兄弟が登場し、彼らが過ごした夏の経験と、そこで習得した教訓が描かれています。舞台は郊外の住宅地ですが、ロボットやモンスター、不思議な色の空、おかしな形の影、真冬の光景、そして各場面に偏在するカラスなど不思議なもので満ちています。奇妙な光景は、ルールになぞらえた文章が組み合わせられることで、兄弟の関係性や心の内を物語るリアルな絵に見えてきます。例えば、「せっかくの計画を台なしにしないこと。」という文と組み合わせられた場面では、敵の根城に忍び込み宝を盗み出すおとぎ話になぞらえ、大人に内緒でいたずらをして失敗をしたときの子どもの行動と心理が見事に描かれています。油彩による陰鬱な色彩と重厚な筆致がさらにおかしさを誘います(図3)。

タンが描く世界は、どこかで通底しているようですが、その表現方法は多彩で



図3 せっかくの計画を台なしにしないこと。『夏のルール』(河出書房新社)より 2013年

す。彼の名を世界中に知らしめた長編絵本『アライバル』は、全128頁にわたり言語を使わず、漫画や映画の文法を取り入れて、モノクロームの絵だけで物語を表現しています(図4)。挿し絵入りの短編集、絵本、文字のない長編絵本など表現形式を変え、漫画風にデフォルメした線、歴史画のようなドラマチックな油彩、写実的な描写など、いくつものスタイルで融通無碍に描かれています。そして、作品ごとに絵と文のバランスが吟味され、ことばが語らない部分を絵に語らせ、絵とことばのつなぎ目に私たちを誘います。文を読み、絵を見返すたびに新たに物語を発見できることでしょう。

本展と同時に、4月に引き続き、「ちひろ いのちを見つめて」と「ちひろ美術館コレクション ねずみとはりねずみの絵本展」を開催します。(原島恵)

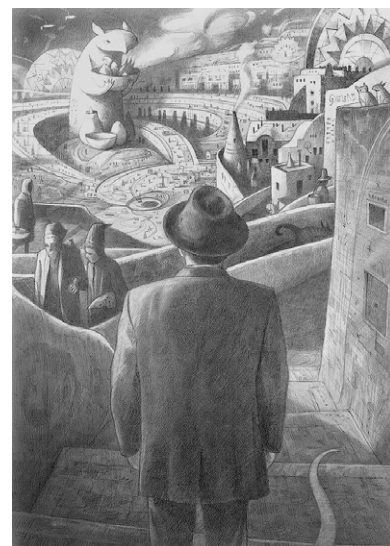


図4 階段「アライバル」(河出書房新社)より 2004~2006年

〈企画展〉没後10年 瀬川康男 坦雲亭日乗—絵と物語の間 いわさきちひろ 子どものしあわせ—12年の軌跡

●～2020年10月11日(日)



図1 「〈企画展〉没後10年 瀬川康男 坦雲亭日乗—絵と物語の間」 展示室1



図2 展示室2

ちひろ美術館・東京の再開時には、3月に10日間しか開催できず、再開を待ちわびる声が寄せられていた「〈企画展〉没後10年 瀬川康男 坦雲亭日乗—絵と物語の間」と「いわさきちひろ 子どものしあわせ—12年の軌跡」を継続して開催します。前回208号の美術館だよりで展示紹介をしておりますので、今回は展示会場のようすを一部ご紹介します。

瀬川康男展では、山里の暮らしを始めた40代後半からのスケッチやタブロー、絵本の原画等を、日記「坦雲亭日乗」に記したことばや資料とともに構成しています。展示室1では、瀬川のアトリエのイメージを再現しています(図1)。正面の8点は、手に任せたらどうなるかを追求しようと、一日に何枚も早がきで仕上げる試みをしていた1981年の観音像や女人像、不動明王像です。その左右の不動明王像は、瀬川が自画像とも語った作品で、早がきを経た後の、緻密な描き込みがなされています。展示室2では、『絵巻平家物語(全9巻)』の原画を展

示しています(図2)。折々のことばかりは、絵を描くことと生きることが直結した画家の姿が見えてきます。

いわさきちひろ展(図3)では、1963年から亡くなるまでの12年間、ちひろが表紙絵を描いた月刊雑誌「子どものしあわせ」の作品を展示しています。年代を追って見ていくと、この12年の間にちひろの絵が大きな変遷を遂げていることがわかります。描かれた絵と、ちひろがデザインした雑誌との比較も、本展の見どころのひとつです。

当初この初夏に開催の予定だった「〈企画展〉生誕110年 赤羽末吉展 絵本へ



図3 「いわさきちひろ 子どものしあわせ—12年の軌跡」 展示室4

の一本道」は、残念ながら次年度に延期することになりました。ですが今年は、赤羽の絵本やエッセイの復刊が相次ぐほか、明治末から平成にかけての波乱の人生を記した初の評伝『絵本画家 赤羽末吉 スーホの草原にける虹』(図4)や、『赤羽末吉 絵本への一本道』(図5)も新たに出版されています。赤羽末吉の全遺作をご遺族から寄贈されて22年。展覧会でもこの間の調査を踏まえ、今も読み継がれる数々の絵本を描いた赤羽の人生に迫るべく、準備を進めています。来年の開催にどうぞ、ご期待ください。

(上島史子)



図4 『絵本画家 赤羽末吉 スーホの草原にける虹』赤羽茂乃・著 福音館書店



図5 『コロナ・ブックス 赤羽末吉 絵本への一本道』平凡社

●活動報告

おうちで楽しめるコンテンツ 新たな取り組み「エア美術館」

新型コロナウイルス感染症の拡大が世界中に暗い影を落としている今、思うように外出できず自宅で過ごしている方に、少しでも美術館に遊びに来たような気分を味わってもらいたいと、ちひろ美術館では、SNSを活用した「エア美術館」という新たな取り組みに挑戦しています。

美術館の公式SNS(Facebook、Twitter、Instagram)で、「#エア美術館」「#おうち時間で学ぼう」「#自宅でミュージアム」のハッシュタグをつけて、展覧会や作品の魅力を紹介するというもの。展示関連イベントの中止により

行えなかったギャラリートークや、画家・田島征三さんによる企画展についてのお話など、動画の配信も行いました。

5月15日(金)からは、ちひろ美術館スタッフ「お気に入りの作品」の投稿を始めました。ちひろ美術館で働くスタッフが、約9,500点あるいわさきちひろの作品のなかからお気に入りを選び、その作品への想いをリレー形式で語る企画です。子育て中のスタッフは自らの子どもとちひろが描いた子どもたちを重ねたり、自身が子どもだった時に印象的だった作品を思い出したり。私たちスタッフにとっても、ちひろの作品と素の自分が

向き合うことのできる企画になりました。スマートフォンやパソコンの画面越しにはなりませんが、美術館で過ごす心穏やかな時間や、作品の持つ力を感じていただけるとうれしいです。(宗像仁美)

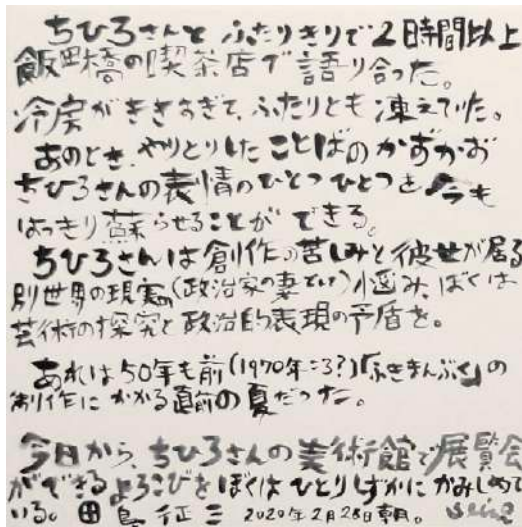


「〈企画展〉田島征三展『ふきまんぶく』—それから、そして、今—」展示関連イベント 2月28日(金) 田島征三アーティストトーク

2月28日に行われたプレス内覧会で、伊豆から来館された田島征三さんが自作などについて語られました。その一部を紹介します。(松方路子)

いわさきちひろとの出会い

あれは1970年、もしくは69年あたりではないかと、ちょうど50年前ですね。童美連の理事をちひろさんもほくもやっていたのですが、ちひろさんも、ほくも滅多に出てこないで、お会いしたのは、その日、偶然にでした。お互いに顔見知りというくらいで、ゆっくりお話ししたのは、その日だけだったんですね。しかも、2時間か3時間くらい、かなり濃密にふたりきりでお話ししたことを思い出



して、書きました(下図参照)。

展示室に、米軍機墜落事故の館野鉄工所事件のことを絵にしたものとか、ベトナム反戦野外展のパネルとかがありますが、けれども、「社会問題と芸術」そんなことを話し合ったと思います。

そのちひろさんの美術館で展覧会をさせていただけるというのは、やっぱりすごく感慨深いです。

今描いている最新作について

絵本『つかまえた』は少年と魚のお話です。こんな大きい魚じゃないんですけど、ほくは子どものとき、ドンコという魚を手づかみにするのが得意で。その魚も命がけだし、こっちも必死になっ

て、手のひらのなかで魚がグリグリって暴れる、あの感触っていうのが今もここ

(手のひら)にあるんですよ。その感触を、水の流れとか、少年の心のなかの、一匹の、魚を得るという欲望と、逃げて行ったときの喪失感、そういうものは絵にすることは難しいし、見えるものではないわけですね。感触とか、心の底にある少年のやわらかな感性というものを可視化するのは難しいわけですけど、それに挑戦しようとしている絵本なんです。

今年の夏に出版しようとは今もう悪戦苦闘している最中です。(展示されているのが)その試作です。7月に神田で個展をやるんですけど、そこにも大量に描いた試作を出すんです。そういうものをもとにして絵本ができていく。それは『ふきまんぶく』でやったことと同じなんです。「なんでこれ使わなかったの?」なんて後で言われるようないいものも、いっぱいあったりして、けれどそのなかから、絵本というのは1ページ1ページがよくても、全体として成立しないとひとつのメッセージを伝えることができないわけです。だから、これはいいけど捨てよう、みたいな感じのことを今やっている最中なんです。オリンピックは延期になっても、絵本はどうしても出したいと思っています。



窓

「パンデミックの時代の美術館」

竹迫祐子(公財)いわさきちひろ記念事業団事務局長

今、世界は新型コロナウイルス感染症のパンデミックと向き合っています。日本でも、4月7日には国による緊急事態宣言が発令、感染予防のために「自粛」が求められました。学校の休校、一部の生活必需品を扱う店舗以外の休業が要請され、ちひろ美術館も臨時休館しました。

ウイルスの目に見えない恐怖は、私たちに大きな不安とともに、疑心暗鬼の気持ちを芽生えさせ、感染された方や医療従事者とその家族、在日外国人の方々に対する理不尽な差別も報道されました。企業の事業縮小や休業により職を失い、生活困難に陥った方も少なくありません。こうした状況に対して国の対応は遅く、国民生活に混乱や困難を一層広げた感も否めません。

文化も例外ではありません。5月18日、ユネスコは世界博物館の日に、新型コロナで世界9万5千の美術館博物館の内、8万5千館が影響を受け、その13%近くが閉館する可能性がある」と発表しました。日本の

音楽、映画、演劇等の分野からは、このままでは文化が死滅すると声上がり、各分野合同で、「文化芸術復興基金」の創設を求める要望書を国に提出しました。日本は、旧来から決して文化支援が手厚い国ではありません。一方、ドイツでは、メルケル首相が、「文化イベントは、私たちの生活にとってこのうえなく重要なもの」「私たちは(芸術文化によって)過去をよりよく理解し、またまったく新しい眼差しで未来に目を向けることもできる」と語り、ドイツ在住の芸術家に対して、仕事場の経費や家賃の支援を行いました。

世界中の芸術家や美術館博物館は、この間、SNSを通じて数多くの発信を行い、人々を励ましています。当館を含め多くの美術館がコレクションをオンラインで公開し、演奏家たちはそれぞれの自宅から共演して見事なハーモニーを奏でました。

パンデミックは、奇しくも人間が持つ素晴らしい側面と、偏見や差別、暴力など醜

悪な側面をも浮き彫りにしました。同時に、この国の政治の質をもあぶり出し、弱い立場の人にしわ寄せを及ぼすパンデミックは、日ごろ看過してきた経済格差、偏見と差別、ジェンダー等の問題を顕在化させ、ウイルスの恐怖に重ねて、深刻な社会問題を私たちに突き付けています。

グローバル化が進んだ今日、パンデミックは、国を閉じて自国だけで解決できる問題ではありません。閉鎖と分断ではなく、世界が互いを尊重し理解しあい、手を携えていかなければ解決できない、人類共通の課題です。これからの時代、美術館の在り方も変化を余儀なくされるところがありますが、人が芸術文化に触れ、今を見つめ、自分とは異なる考えや価値観、感性、時代、社会、生活に出会うことは、誰もが持つ権利です。そして、“過去を深く理解し、未来への眼差しを開く”、その場の提供は、まさしく私たち美術館の活動の普遍的な使命。ご来館をお待ちしています。

東京 美術館 日記



2月13日(木) ☔のち☀️
ちひろ美術館コレクションの柱でもある赤羽末吉。今年の生誕110年にあわせて刊行される書籍のための原画撮影が行われる。当館でも節目の年を彩る記念展を予定。多くの絵本を遺した赤羽の魅力を改めて発信する1年にしたい。

(※この後、当館での赤羽展の開催は2021年への延期が決定されました。来年に乞うご期待。)

3月21日(土) ☀️
月に2回、定例で行っていた展示室でのギャラリートークが中止となり、展示中の瀬川康男展の見どころを美術館のブログとSNSで紹介する「おうちでギャラリートーク」の配信をスタート。外出の難しい期間に、自宅で芸術に触れる機会になればうれしい。

3月31日(火) ☁️時々☔
時間をかけて準備してきたふたつの展覧会を3月1日に開幕させたものの、4日から新型コロナウイルスの影響で臨時休館。20日から再開したのも束の間、再び28日から休館という不測の事態が続いている。ガラんと静かな館内で、一日も早い事態の収束を願う。

5月5日(火・祝) ☀️
外出自粛要請が続くなかでの「子どもの日」。ちひろが残した「子どもは全部が未来」ということばを胸に、世界中のすべての子どもたちの健やかな成長を祈る。

5月13日(水) ☀️
ちひろの庭で白いバラの花が甘い香りを漂わせ、見ごろを迎えている。長引く臨時休館中も、スタッフが交代で水やりを続けた甲斐が



あり、今年もどうか美しい花をつけてくれた。日常がままならないなか、植物の生命力に元気をもらおう日々が続く。

5月15日(金) ☁️
東京・安曇野のスタッフそれぞれの自宅から初の両館リモート会議。画面越しではあるが、徐々に顔をあわせ、声を聞き、無事を確かめ合う。今後安心して来館してもらえるよう、展示方法や受付対応の変更点などについて意見を話し合い、再開への準備を進める。

安曇野 美術館 日記



2月18日(火) ☁️
開館に向け、冬期休館中はシートに覆われていた「電車の教室」の掃除を行う。床掃除や窓ふき、普段は手の届きにくい箇所も入念に。展示物が再び勉強机に並び、新しい一年が始まることを実感。

3月28日(土) ☁️
インスタグラムに投稿した作品解説動画について「毎日楽しませていただいています！」という感想とともにお手紙が届く。あたたかいことばと、わざわざペンをとってくださったことがうれしい。

3月29日(日) ☀️
雪が少なかった今冬。春を目前に10cm以上の積雪が。うっすらと汗をかきながら、駐車場からエントランスまでの歩道を雪かき。冷たく澄んだ空気は気持ちよく、公園では雪遊びをする親子の姿も。

4月18日(土) ☔
新型コロナウイルス感染拡大に伴い、長野県でも自粛要請が発令され、本日から当面の間、臨時休館となる。安全のため展示物を収蔵庫へ入れ、近隣の施設へご連絡をする。

5月14日(木) ☀️
臨時休館中、学芸担当のスタッフがスマートフォンを使い自宅でちひろの水彩技法の動画を作成。絵筆の使い方や色の混ざり合いがわかりやすく伝わるように何度もチャレンジした力作。発泡スチロールを重ねたものに網を渡して真上から撮影するなど、手づくりの工夫が満載。完成した動画は、今後SNSでも公開する予定。どうぞお楽しみに。

6月3日(水) ☀️
清々しい天気今日は、安曇野ち



ひろ公園の大花壇に約7,000株のブルーサルビアの苗を定植。村の職員やボランティアのみなさんと久しぶりにマスク姿でことばを交わす。日頃から農作業に携わる方が多く、さすがの手際の良さで予定より早く作業終了。見頃は6月下旬から9月上旬まで。

6月9日(火) ☀️
県内各地で30度を超える夏日に。再開まであと2週間、安全を第一に、換気や人との距離を考えて空間のレイアウトの見直しをする。季節はあっという間に移り、木々は青々と茂ってきた。

新収蔵 作品紹介 ②



いわさき ちひろ
『鳩と少女』
(1965年)

今回ご紹介するのは、いわさきちひろが雑誌「子どものしあわせ」の表紙のために描いた原画作品「鳩と少女」です。本作品は、ちひろ美術館・東京での展覧会「いわさきちひろ 子どものしあわせ—12年の軌跡」の開催を機に寄贈されました。「子どものしあわせ」(草土文化)は、ちひろが1963年の春から亡くなる1974年まで計12年表紙を手がけた、学校の教師と父母のための雑誌です。

1965年4月号のために描かれたこの作品は2色の印刷でした。少女の顔と手、そして周囲のケシの花のみに水彩絵具で色が使われ、鳩の白さとケシの朱色のコントラストが、鮮やかに感じられます。



少女が大事そうに支える鳩は、ちひろが1960年頃から家で飼っていた白い鳩のポッコを思わせませす。息子、猛の記憶では、ちひろは仕事の手をとめ、ベランダのポッコを見つめていることがあった

といひます。また、鳩に平和の象徴としての意味を込めたのかも知れません。翌5月号の表紙には、少年が手の上に鳩を乗せている絵が描かれています。

(松方路子)

〈ちひろ美術館（東京・安曇野）再開のお知らせ〉

ちひろ美術館（東京・安曇野）は、新型コロナウイルス感染症拡散防止のため臨時休館しておりましたが、感染拡大防止に関するガイドラインを踏まえ、お客さまに安全にお過ごしいただけるよう十分な措置を講じたうえで、ちひろ美術館・東京は6月20日（土）より、安曇野ちひろ美術館は6月27日（土）より、順次、開館を再開いたします。
お越しいただける際には、事前に下記をご確認のうえ、ご来館くださいますようお願いいたします。

●感染症予防のためのちひろ美術館の対策

- ・ 出入口および各展示室前の消毒液の設置
- ・ 手を触れやすい場所の定期的な消毒
- ・ スタッフのマスク、フェイスシールド等の着用
- ・ スタッフの徹底した健康チェック

●当面の間、以下のご利用、ご提供を控えさせていただきます

- ・ 絵本カフェ
 - ※お持ち込みのお飲み物は指定のエリアでお飲みいただけます。
- ・ 子どものへやのおもちゃ、絵本等
 - ※ぜひ、お子様のお気に入りのおもちゃや絵本をご持参ください。
- ・ 視聴覚機器
- ・ ベビーカーと車椅子のお貸出し
- ・ お手荷物のお預かり

●ご来館に際してご協力をお願い

- ・ 以下の方は、ご来館をお控えいただけますようお願いいたします。
 - 過去2週間以内に新型コロナウイルスに感染した方や感染の可能性のある方が身近にいらっしゃる方
 - 発熱や風邪などの症状がある方
 - そのほか、体調がすぐれない方
- ・ 来館者カードへのご記入
 - ※HPからダウンロードして事前にご記入のうえご持参いただけます。
- ・ 館内でのマスク着用
- ・ 館内での手洗いや消毒液などでの手指消毒
- ・ 咳エチケットの実施
- ・ 混雑時の一時的なご入館待ち（入館制限）
- ・ 10名以上の団体でのご来館はご遠慮ください。
 - ※5～9名の小グループでのご来館は、事前にお申し込みをお願いいたします。

●館内でのご協力をお願い

- ・ ほかのお客さまとの間隔を1.5m程度お取りください。
- ・ 展示作品や展示ケース等にはお触れにならないでください。

●安曇野ちひろ美術館の開館時間と休館日（予定）

- ・ 開館期間：2020年3月～11月
- ・ 開館時間：10：00～16：00（当面は時間を短縮して開館します。）
- ・ 休館日：毎週水曜日（当面の間）
 - ※最新情報は、当館HP・各SNSなどをご覧ください。

〈2020年の展覧会予定について〉

臨時休館に伴い、今後の展覧会開催についても見直しを行い、下記のように変更を予定しています。なお、当面の間、ギャラリートーク、絵本のじかんを含め、館内でのイベント開催は中止いたします。

●ちひろ美術館・東京

6月20日（土）～10月11日（日）

- ・ いわさきちひろ 子どものしあわせ—12年の軌跡
- ・ 〈企画展〉没後10年 瀬川康男 坦雲亭日乗—絵と物語の間

10月17日（土）～2021年1月31日（日）

- ・ 子どもの心を見つめて いわさきちひろ展

わらびを持つ少女「あかまんとうげ」
（童心社）より 1972年



●安曇野ちひろ美術館

6月27日（土）～8月30日（日）

- ・ ちひろ いのちを見つめて
- ・ 〈企画展〉ショーン・タンの世界展 どこでもないどこかへ
- ・ ちひろ美術館コレクション ねずみとはりねずみの絵本展

9月4日（金）～11月30日（月）

- ・ ちひろ 色のない色
- ・ 〈企画展〉田島征三展「ふきまんぶく」—それから、そして、これから—
- ・ ちひろ美術館コレクション ふしぎな生き物



「ふきまんぶく」(偕成社)より 1973年

※今年度の開催を予定していた「〈企画展〉生誕110年 赤羽末吉展 絵本への一本道」（ちひろ美術館・東京）、「〈企画展〉田島征彦「祇園祭」展」（安曇野ちひろ美術館）は、2021年度に開催を延期する予定です。

〈年間パスポート期限延長のご案内〉

臨時休館に伴い、年間パスポートの有効期限を延長いたします。対象となるパスポートは、保管していただき、ご来館の際に受付でご提示ください。

●対象となる年間パスポート

有効期限：2020年3月末日～2021年4月末日
延長期間：各6ヵ月（例 2020年3月末日までの期限→2020年9月末日まで有効）

CONTENTS 〈安曇野ちひろ美術館での展覧会〉〈企画展〉ショーン・タンの世界展 どこでもないどこかへ…② / 〈ちひろ美術館・東京での展覧会〉〈企画展〉没後10年 瀬川康男 坦雲亭日乗—絵と物語の間—いわさきちひろ 子どものしあわせ—12年の軌跡 / 〈活動報告〉おうちで楽しめるコンテンツ 新たな取り組み「エア美術館」…③ 〈安曇野ちひろ美術館活動報告〉「〈企画展〉田島征三展「ふきまんぶく」—それから、そして、今—」展示関連イベント 2月28日(金) 田島征三アーティストトーク / 窓「パンデミックの時代の美術館」…④ / 東京美術館日記 / 安曇野美術館日記 / 新収蔵作品紹介…⑤

美術館だより 合併号 No.209/102 発行2020年6月20日